

# 平成30年度文学研究科博士論文要旨

## 藕益智旭の天台教学の研究

文学研究科研究員 ダオ・トリン・チン・ニャン

### (1) 論文の特色

インドで興起した仏教は、紀元前1世紀頃に中国に伝えられた。中国に伝えられた仏教諸経論は、インドにおける経論の歴史的成立順序や学派の流れには関係なく、順序不同に伝えられるままに訳出された。中国の仏教者達は、漢訳された大・小乗の膨大な經典を前にして、仏教本来の立場から仏教をどう理解し、体系化するかという課題を背負うことになったのである。そのためにインド仏教にはみられない中国仏教独自の「教相判釈」が成立した。すなわち、諸種の大・小乗經典を積尊一代の教説として、その説法の様式、あるいは浅深次第などの価値基準によって順序づけ、積尊の真実の教えが説かれた經典を択一した。これが教相判釈の起りであり、やがて学派や宗派を生む契機となったのである。

5世紀から6世紀の南北朝時代に流行した「南三北七」（中国の南地の三師と北地の七師）と総称される多数の教相判釈が成立した。

その中でも、天台智顛（538-597）が大成した「五時八教」の教相判釈が最も体系化されたものである。「五時」とは、(1)華嚴時、(2)鹿苑（阿含）時、(3)方等時、(4)般若時、(5)法華涅槃時である。「八教」とは、化儀の四教と化法の四教をいう。積尊が人々を教え導く形式、説法の形式や方法を判釈した「化儀の四教」は、(1)頓教、(2)漸教、(3)秘密教、(4)不定教をいう。さらに「化法の四教」は、積尊が人々の素質や能力や性質に応じて教え導いた教理内容を判釈したもので、(1)蔵教、(2)通教、(3)別教、(4)円教をいう。

本論文は、天台の「教相判釈」に関係するもので、明代末の藕益智旭（1599-1655）を主題にしたものである。智旭の天台関係の著書として『教観綱宗』1巻・『教観綱宗釈義』1巻・『法華経会議』16巻・『法華玄義節要』2巻・『妙法蓮華経論貫』1巻・『大乘止観法門釈要』4巻の六種がある。これらの中で、天台の教相判釈に関する著書として『教観綱宗』と『教観綱宗釈義』がある。

智旭以前の天台の教相判釈に関する著書として、天台智顛の『法華玄義』『大本四教義』『維摩経玄疏』などが

あり、六祖の荊溪湛然（711-782）の『法華玄義釈義』、宋代の高麗諦観（?-971）の『天台四教儀』などがある。諦観の『天台四教儀』は、唐末の混乱期に天台教学の典籍が散逸したため、呉越王銭弘俶は、建隆元年（960）高麗に使いを遣わせて典籍を求め、天台教学復興に尽力した。天台の教観を究め、国王の知遇を得ていた諦観は、諸論疏を携持して天台山へ向かった。自からも天台学の入門書『天台四教儀』を著わした。かつてこの『天台四教儀』は、関口真大氏によって廃止論が叫ばれたが、今も天台を学ぶ基礎として重視されている。本論文は、天台の教判に関して、天台智顛と高麗諦観と藕益智旭の三者の教学を比較対照しながら、智旭の教説は、天台智顛の教義に適合しているか否かを確認し、智旭の新説をも究明しながら論を進めている。三者を徹底的に比較検討することは、従来行われておらず、学界に大きく寄与すると確信する。

### (2) 本論文内容の要旨

本論文は、序論・本論・附編・結論・注・参考文献から構成されている。

本論の第一章の「智旭と天台教学」では、智旭が天台学系の諸師との出会いと天台学を学んだ契機について究明した。天台教学に関する智旭の著書を列挙し、さらに、智旭の主著である『教観綱宗』の標題と分科を示し、著述した意図を解明した。

第二章の「智旭の天台教相判釈」のうち、まず第一節では「五時の通・別の論述方法」として、智顛が説く別の五時・通の五時、諦観が説く別の五時・通の五時、智旭が説く通の五時・別の五時それぞれを解明した。

第二節の「化儀四教についての智顛・諦観・智旭の解釈」では、天台教判の化儀の四教について三者の説を比較するため、智顛は『法華玄義』により、諦観は『天台四教儀』により、智旭は『教観綱宗』を用い、三者の比較を通して、智旭の真意を究明した。

第三節の「化法四教の解釈」では、化法の四教の本来の教義を究明し、三蔵教の生滅四諦・思議生滅十二因縁・事六度、通教の無生四諦・思議不生滅十二因縁・理

六度、別教の無量四諦・不思議生滅十二因縁・不思議六度十度、円教の無作四諦・不思議不生滅十二因縁・称性六度十度について解明した。また、化法四教の二諦・三諦について、智顛と智旭とを比較対照した。

第三章は「天台観法についての智旭の解釈」を究明するのに、第一節の「化儀四教からみる観法：化儀四教と三種止観」として、智顛と智旭の三種止観をそれぞれ究明した。

第二節では「化法四教からみる観法」として、まず化法四教の空仮中の三観、三蔵教の析空観・通教の体空観・別教の次第三観・円教の一心三観それぞれを解明した。化法四教の十乗観法では、まず、智顛の十乗観法を

明らかにし、智顛と智旭の三蔵教・通教・別教・円教それぞれの十乗観法を比較検討した。

第三節の「化法四教の六即」では、三蔵教・通教・別教・円教それぞれの六即を究明した。

附編として、「智旭『教観綱宗』における転・接・同・会・借の五説について」を究明するのに、五説の定義、五説と通別の五時、五説と化儀四教、五説と化法四教をそれぞれの立場から究明した。

以上の目次構成によって、本論文は中国の明代末に活躍した藕益智旭の天台教学が、果して天台智顛の教学に相応しているかを緻密に解明したものである。